

——カトリックの視点から わかりやすく説いた——万物の歴史

現代版「創世記」

大半のカトリック信徒がエコロジーや正義に興味を持っていない(けれど、持つべきである)わけ

さまざまな疑問

高校の研修で、「創世記」について司祭に質問をしたことがあります。すべての人類がみな、一組の男と女の子孫だなどということが、本当にあり得るのでしょうか？ もしそうならば、アダムとイヴの子供たちは、兄弟姉妹同士で結婚しなければならなかったことになります。人類はすべて、近親交配だったというのでしょうか？ 司祭は黙り込み、答えてくれませんでした。

もうひとつ、長年にわたり疑問に思ってきたことがありました。信仰と日常生活の乖離です。日曜日になると礼拝に行き、「神を信じます」と唱え、イエス・キリストの「記念としてこれをおこなって」いる人たちが、月曜日から土曜日のあいだは(日曜日にもやっていることがあります)、神やイエスがはっきりと禁じていることを含め、さまざまな悪いことをしています。

たとえば、長崎のカトリック教会に爆弾を投下した飛行機のパイロットも、そのほかの乗組員もみな、キリスト教徒でした。彼らは、三つの修道会(修道院ではなく)など、多くのカトリック信徒をはじめ、何万人もの市民を死に至らしめました。

爆撃機がテナン島の基地を飛び立つ前、従軍司祭のジョージ・ゼベルカ神父が乗組員たちを祝福しています。

(何年ものちにユーゴスラヴィアを訪問した際、ゼベルカ神父は自らがしたことの重大さに気付きました。8月6日にメジュゴリエ[現ボスニア・ヘルツェゴビナの町]でロザリオの祈りを唱えていた神父とその友人は、広島爆弾投下に想いを馳せることにしました。友人が、そのときのことを語っています。——「彼は崩れ落ち、悲嘆にくれました。その場に、まさに崩れ落ちたのです。そして、『なぜ気付かなかったのだ？ なぜ気付かなかったのだ？ 私は聖務日課の祈りを唱え、ミサをおこない、ロザリオの祈りを唱えた。なぜ気付かなかったのだ？ なぜ気付かなかったのだ？』と、いくどもいくども繰り返しました。その場にいただれもが衝撃を受け、畏れを抱きました。それは、悲痛としか言いようのない姿でした。』)

このテーマ(信仰と日常生活の乖離)の祈りに関する著作で国際的に知られる司祭にも、訊ねてみたことがあります。彼は、自分はそのような疑問は持ったことがない、と答えました。

古くは十字軍があり(ローマ教皇ウルバヌス2世が第1回十字軍の結成を支援し、司教が従軍した十字軍や、多数のシトー修道会士が従軍司祭として加わった十字軍もありました)、宗教裁判があり、世界各地の植民地化の歴史がありました。カトリック教会は、大虐殺、奴隷化、原住民の搾取に深く関わってきました。(1986年制作の映画『ミッション』を参照のこと。)

信仰と日常生活の乖離は、日本でも起きていました。1567年のクリスマスの日、堺で宣教活動をしていたイエズス会士ルイス・フロイスは、合戦中だった両陣の武士たちを招いて、ともに聖誕祭を祝っています。彼らは喜んで招きに応じ、「我々はキリストのもとで兄弟である」と言いながら帰っていきましたが、翌朝になると、また殺し合いをはじめたといいます。

また、ある武将は、戦役を退いたのち、僧になりましたが、不殺生戒を説かれると、耳が聞こえないふりをしたそうです。武将としてこれまでやってきたことが、不殺生戒と矛盾することがわかっていたのです。彼が少なくとも、そのことを認識していたのは幸いです。

法皇に召されたとき、「当家の頭として、お召しにより参上つかまつりましたが、そうでなければ勅令があっても参りませぬ。源氏は二君には仕えませぬから」と言上したという、源頼朝の祖父、為義のひたむきさが、私たちにもあったなと思います。

「二君に仕えることのできる者はない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に尽くして他方を疎かにするかの、どちらかである。神と金の両方に仕えることはできない」と言って、イエス・キリストが求めたひたむきさが、まさにこれでしょう。(マタイ 6:24)

ゼベルカ神父と長崎に爆弾を投下した飛行機の乗員たちは極端な例かもしれませんが、日常生活において、例はいくらでもあります。カトリック信徒の銀行員が、貧しい者から金をとりたてています。カトリック信徒の政治家や官僚が、面倒を見てやるべき人々を逆に傷つけるような決断を下しています。カトリック信徒のビジネスマンは、たとえそれが最貧困層から搾取し、環境を破壊することであっても、最大の利益を得るためならばなんでもします。なぜでしょうか？

もうひとつ、しばらく前から私が疑問に思うようになったのは、人類による地球の破壊です。生物学者の E.O.ウィルソンは 1986 年に、人類が毎年、数万もの種を絶滅に追いやっていると推定しました。私たちはいま、化石燃料を使うことで、地球上のあらゆる生命を脅かしています——地球上の、まさにあらゆる生命を、です。自分たちの唯一の住み処である地球を破壊しているのであり、しかも、そのことにほとんど無関心でいます。いったい、自分の家に火をつけて焼いてしまう人など、いるでしょうか？ 自分の家のなかに、わざわざ有害廃棄物を置いておく人などいるでしょうか？ 人類が住めそうなべつの星を探そうとしているのは、そのためなのでしょう？ 地球はもちろん、神の創造物です。私たちは、神を敬うと言いながら、その神の創造物を破壊しているのです。

この疑問に関連して、キリスト教と科学の関係の問題もあります。米国では、進化論と天地創造をめぐる議論が起きています。聖書の天地創造の物語を信じる人は、進化論を受け容れられません。でも、世界はひとつしかないのです。真実たるものは、すべての真実と両立するものでなくてはなりません。ふたつの真実のあいだに、明かな矛盾があれば、その矛盾は解決しなければなりません。ひとつ、あるいは両方の「真実」をともに、見直さなければならない場合もあります。

この疑問を解くには、歴史を少し知っておく必要があります。人類がいまの地点にどのようにしてたどり着いたのか、知る必要があるのです。本稿は、私たち人類がどのようにして現状に至ったのかを、私なりに説明しようとしたものです。私は学者ではなく、この分野の専門家でもありません。本稿執筆にあたっては、巻尾に挙げた多数の著者の著作を参考にさせていただきました。間違いや不足もあると思いますが、日常生活と信仰が乖離している現状について、読者の理解の一助になれば幸いです。

間違いがあれば正していただき、不足部分は補足していただければと願っています。

私は本稿を、長い学術的な、何百もの脚注や参考文献がついているような書物ではなく、だれにでも読みやすい小冊子にしたいと思って書きました。(コロンバン会のウェブサイトにも載せたいと考えています。<http://www.columban.jp/>)

天地創造

宇宙のはじまりについて、現在、科学者のあいだでもっとも広く受け容れられているのは、ビッグバン説です。(宇宙のはじまりについての研究は、日々続いています。今日、2012年8月21日付の新聞で、これとはまたべつの理論を提唱する科学者たちについて読みました。

<http://www.theage.com.au/technology/sci-tech/melbourne-researchers-rewrite-big-bang-theory-20120821-24j5z.html>)

もちろん、これらの科学者の説を信じるキリスト教徒たちは、爆発(ビッグバン)が起きる前から神は存在していた、神が爆発を起こさせた、と信じています。

ビッグバンは、巨大なエネルギーの爆発だったはずですが、エネルギーそのものが粒子を形成し、その一部が互いに引き合って原子を形成し、これらが巨大なガス雲を形成しました。原子番号1を持つ、宇宙でもっともシンプルな元素である水素——その水素ガスの雲の中心で、より濃度の濃い原子が形成されました。中心のあたりに、巨大な、やわらかいガスの球体が形成され、球の中心で活発な原子や分子がますます引き合って近づき、ひしめき合って強い熱を帯びるようになりました。このガスの球がさらに熱を帯びて、重量を増してゆき、星になりました。

最初にできた初代の星たちは、重くなりすぎて崩壊しました。膨張し、そして爆発したのです。次の世代の星たちは、自分の原子を、より大きく、より重たいものにし、やがてもとの水素原子から宇宙のさまざまな要素がすべて形成されました。

(詳細については、ブライアン・スウィム／トーマス・ベリー著『The Universe Story』やエリサベット・サトウリス著『アースダンス』などを参照のこと。)

爆発する星たちの原子の一部が、惑星を形成していきました。約45億年前、私たちの太陽を形成した星の爆発によるガスや塵の一部が集まって、12種類の原子でできた「地の球」が生まれました。それは、濃縮してゆくにつれて重量を増し、より高速で回転するようになりました。圧力による熱と内部の核融合反応で、固まった物質が溶け、激しく燃える液体になりました。この火の球の外側の、冷たい宇宙空間に触れている部分は、冷やされて、薄い皮殻質になりました。地球の「皮」は岩石でできており、その内部では、熱く溶けたマグマのマントルの中心で、もっとも重たい元素が固形化しました。液状に溶けた熱いマントルが火山から吹き出すのを、私たちも見ることができます。

溶岩から発生した蒸気が、のちに濃縮して雨水になり、これが海になりました。

太陽光のエネルギーが分子の電磁気力を生み、大気中で嵐を起こし、岩石塵、泥、海水の分子を

分解して、より大きな新しい分子を再形成していきました。

自然に形成する糖類や酸などの大きな分子は、多量のエネルギーを吸収しており、それが、化学反応を加速して、より大きな分子の形成を助けてました。活発な、エネルギーを得た地球の炭素は、酸素、窒素、硫黄、リンと結合しました。

百万年以上の歳月にわたり、生命が進化してきたことを、私たちは知っています。でも、具体的にどのようにして進化してきたのかについては、科学者たちも確証を得ていません。稲妻や太陽放射線の紫外線が関係する化学反応によって、大気中で生命が生まれたと考える学者もいれば、地中から新鮮な物質が生じる一帯——まったく異なる化学構成を持つ冷たい海水と爆発的に反応する——温泉付近の海で生命は生まれ、最初の微生物たちは海水もしくは湿地帯で生まれた、と考える学者もいます。最初の微生物は、単細胞バクテリアだったはずで、今日でも、バクテリア(細菌)は地球上に最多数存在する生物です。

人類

私たち人間も、その構成元素は、じつは前述の元素(炭素、酸素、窒素、硫黄、リン)とほとんど変わりなく、水素が加わっているだけです。これらの元素はすべて、熔融岩石の百万倍の熱さの温度で形成されており、それぞれの原子が、燃えるような星の熱でできています。私たちは、じつは星の原子でできているのです。自分の手を見てみてください。その手も、星の原子、数十億年前にできた原子でできているのです。

私たち人類は、星と太陽がなければ生きてゆけません。本稿を読むあいだにも、イオンが脳内をめぐり、思考を支えているのです。では、イオンを動かしているのはなんのでしょうか？ 私たちが思考し、感じ、思いを巡らせる、その原動力になっているのはなんのでしょうか？

イオンは自分の力で動いているのではありません。くわしく調べてみると、エネルギーに満ちた脳内の分子が、イオンを動かしていることがわかります。さらにくわしく調べてみると、分子はエネルギーを得て、イオンを動かしていることがわかります。そのエネルギーのおおもとは、身体が摂取した食べものであり、食べものは、太陽からエネルギーをもらっています。食べものは、その分子の網で光子(光の粒子)を捕らえ、この光子エネルギーが脳内のイオンを押ししたり引いたりして、たったいま読者自身がしているような、人間の驚くべき主観を可能にしているのです。太陽エネルギーをどのように取り入れているかによって、いまこの瞬間も、私たちの体内で、イオンはあちらへ流れたりこちらへ流れたりしているのです。

それだけではありません。光の粒子はどこから来たのでしょうか？ 太陽の核では、原子核融合によって水素原子からヘリウム原子が創られ、そのプロセスのなかで太陽光の光子が放出されていることがわかっています。では、光子が水素原子でできているならば、水素はどこから光子を得ているのでしょうか？ ここから、原始における火の球、創世の瞬間に、話がつながっていきます。

前述のとおり、原始の火の球は、とてつもない規模の、溢れ、ほとぼしるエネルギーでした。最初はそのすごい力で、高潮に流される小さな樹皮のように、素粒子を運んでいきました。でも、火の球が膨

張しつづけるにつれて、エネルギーのレベルが下がって落ち着き、やがて水素原子の集合体のなかにある電子や陽子がエネルギーを獲得できるようになりました。水素原子は、火の球のエネルギーを得て燃え上がり、調和するエネルギーの嵐が引き合い、エネルギーをため込んでいきました。でも、星の核では、水素原子はエネルギーを光子のかたちで放出せざるをえません。そして、この原始からの光の粒子のシャワーが、私たちの思考する力の源になっているのです。

「すなわち、原始からのエネルギーが、いま、私たちに力を与えていることになる。私たち自身が宇宙エネルギーなのである。私たちは覚醒した宇宙であり、私たちを生かしている精神エネルギーは、宇宙全体のエネルギーにほかならない。」宇宙の物語は、私たち自身の物語です。その物語を知らなければ、自分自身を知らない、つまり、なにも知らないことになるのです。(詳細については、ブライアン・スウィム著『宇宙はグリーン・ドラゴン—ビッグバンは地球に何をたくしたか』を参照のこと。)

歴史

昔の人々は、ビッグバンのことを知りませんでした。彼らは、自分たちをとりまく世界を理解するために、季節、干ばつ、雷や稲妻、野火、日食や月食、彗星、死、月経などの現象を説明する物語を創りました。オーストラリアのアボリジニには「ドリームタイム(アルチェリング)」があり、ギリシャや日本にもそれぞれの神話があります。

古代の人々は、自らコントロールできない現象(火災や死など)について、人間よりも遙かに大きな力を持つなんらかの存在(単数または複数)によって創られ、支配されている、と結論したと考えられ、この「存在」を「神」と呼びました。日本の神は自然現象とその脅威に対する畏敬の念から生まれた、と岩井宏實は述べています。

数千年前に西アジアで、神が 7 日間で宇宙を創った、という創世の物語が創られました。この物語では、神様は先に男を創ったとはされていません。ほぼ同時期に、そこからさほど遠くない地域で、これとはまたべつの物語が創られました。こちらの物語では、神はまずひとりの男を創り、つぎに、その男の肋骨を使って女を創った、とされています。

紀元前 1700 年頃、現在のイスラエルからパレスチナのあたりにいた人々が、エジプトへ移住しました。前述のふたつの創世の物語を創った人々も含まれます。彼らは飢饉のため食物を求めて、あるいは仕事を求めて移動した、と学者たちは考えています。これらの人々を呼ぶ名はいくつかありますが、そのひとつが「ヘブライ人」です。

その地方に飢饉があった。アブラムは、その地方の飢饉がひどかったので、エジプトに下り、そこに滞在することにした。(創世記 12:10)

ヤコブは、エジプトに穀物があると知って、息子たちに、「どうしてお前たちは顔を見合わせてばかりいるのだ」と言い、更に、「聞くところでは、エジプトには穀物があるというではないか。エジプトへ下って行って穀物を買ってきなさい。そうすれば、我々は死なずに生き延びることができるではないか」と言った。(創世記 42:1-2)

彼らは当初、エジプトの支配者に好意的に迎えられ、土地を与えられて繁栄しました。でも、王が変わり、増えたヘブライ人がエジプトの社会・経済的秩序を脅かしつつあることが明らかになると、王はヘブライ人たちを支配下に置こうとしました。

そのころ、ヨセフのことを知らない新しい王が出てエジプトを支配し、国民に警告した。「イスラエル人という民は、今や、我々にとってあまりに数多く、強力になりすぎた。抜かりなく取り扱い、これ以上の増加を食い止めよう。一度戦争が起これば、敵側に付いて我々と戦い、この国を取るかもしれない。」(出エジプト記 1: 8-10)

まず、奴隷を監督する者をつけて、ヘブライ人たちに重い労役を課しました。長時間の労働をさせて疲れさせることによって、組織化したり計画したりする時間と労力を奪おうとしたのです。

エジプト人はそこで、イスラエルの人々の上に強制労働の監督を置き、重労働を課して虐待した。イスラエルの人々はファラオの物資貯蔵の町、ピトムとラメセスを建設した。しかし、虐待されればされるほど彼らは増え広がったので、エジプト人はますますイスラエルの人々を嫌悪し、イスラエルの人々を酷使し、粘土こね、れんが焼き、あらゆる農作業などの重労働によって彼らの生活を脅かした。彼らが従事した労働はいずれも過酷を極めた。(出エジプト記 1:11-14)

過酷な労働を強いるだけではヘブライ人を支配できなかったため、エジプト人たちはさらに、ヘブライ人の男児を殺してしまうことにしました。

エジプト王は二人のヘブライ人の助産婦に命じた。一人はシフラといい、もう一人はプアといった。「お前たちがヘブライ人の女の出産を助けるときには、子供の性別を確かめ、男の子ならば殺し、女の子ならば生かしておけ。」(出エジプト記 1:15-16)

やがてエジプトの王が死ぬと、ヘブライ人たちは解放を求めて、自分たちの神に呼びかけました。人々が虐げられ、迫害されているのを見た神は、解放を求める彼らの声を聞き、彼らを自由にすることにしました。

それから長い年月がたち、エジプト王は死んだ。その間イスラエルの人々は労働のゆえにうめき、叫んだ。労働のゆえに助けを求める彼らの叫び声は神に届いた。神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの人々を顧み、御心に留められた。(出エジプト記 2:23-25)

神は、虐げられている人々を通して御業(みわざ)をおこなうことにし、ヘブライ人たちを自由に導く、ひとりの男を選びました。モーゼです。神はモーゼに現れて言いました。

私は…彼らをエジプトびとの手から救い出し、これをかの地から導き上って、良き広い地…に至らせようとしている。いまイスラエルの人々の叫びが私に届いた。私はまたエ

ジプトびとが彼らを虐げるさまを見た。さあ、私は、あなたをパロにつかわして、私の民、イスラエルの人々を、エジプトから導き出させよう。(出エジプト記 3:7-10)

「神は、虐げられた人々のなかからひとりを選び、自由へ導く者とした。つまり、自由への解放は、人間によって、人間のやり方でなされることになる。」「自由へ導くリーダーは、民のうちから出る。」(詳細については、L. John Topel 著『The Way to Peace』を参照のこと。)『遠い夜明け』という映画をご覧になった方もあると思います。神はネルソン・マンデラなどのリーダーを通して、南アフリカ共和国の虐げられた人々を解放したのです。

近年、チュニジアやエジプトでも似たような場面が見られました。日本では過去に「世直し一揆」が起きています。

神はその名である「ヤハウェ」を、「解放へ導く者」と説明しました。「それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい、『私は主(ヤハウェ)である。私はあなたがたをエジプトびとの労役の下から導き出す]…であろう。』(出エジプト記 6:6)

この「それゆえ」の部分は、とても重要です。神は、虐げられた人々を解放する者です。神は、虐げられているすべての人の解放を望んでいます。

おそらく権力への抵抗や闘争(記録では伝染病)を経て、ヘブライ人たちは最終的にエジプトから逃れることができました。

これらの人々はおそらく、およそ同時期にエジプトから現在のイスラエルへと移住し、のちに合体して「12 部族」を形成したヘブライ人の集団のなかの、ひとつに過ぎなかったと思われます。出エジプト記 12:38 は、複数の人がエジプトからイスラエルへ逃れたと記しています：

そのほか、種々雑多な人々もこれに加わった。羊、牛など、家畜もおびたしい数であった。

最初に日本に住んだ人々は、おそらくアジア大陸や南太平洋地域のさまざまな地から渡来したと思われます。モンゴロイドが主で、マレー系の人々もかなり混じっていたでしょう。この人種の混在、多様性を認めがらない人もいます。私は 2001 年 4 月、べつべつにふたりの人が、「日本人は単一民族だ」と言うのを聞きました。日本にマイノリティ(少数民族)はいない、日本人は古来よりひとつの民族だった、と暗に言っているのです。このような説は、アイヌ民族をはじめ、韓国系や中国系の人々の存在を見落としており、熊襲(くまそ)の血筋が現在までつづいている可能性があることも見落としています。

(1986 年 9 月 24 日、中曽根康弘、総理大臣在任中、「アメリカは多民族国家だから教育が容易でなく、黒人、プエルトリコ、メキシカンなどの知的水準がまだ高くない、日本は単一民族国家だから教育が行き届いている」という趣旨の教育に関する発言を行った。詳細については「ウィキペディア」：『単一民族国家』、衆議院会議録情報 第 107 回国会 本会議 第 5 号などを参照のこと。)

ヘブライ人たちは、イスラエルにたどり着くと、部族や家族ごとに土地を割り当てられました。彼らは狩猟をし、農耕もはじめました。ダビデの時代まで、彼らはおもに農民と羊飼いでした。

貧困の原因(1)

私は、以下のようなことが起きたのではないかと想像しています。家族経営の農場では、子供や親族が労働の担い手になります。家族が多い家もあれば、少ない家もあります。肥沃な土壌や水源に恵まれた農場があれば、痩せた土地もあります。家族が多く、肥沃な土地に恵まれた家は、繁栄しました。

農場で働く人手が少なかった家、痩せた土地を割り当てられた家、敵襲を受けた家、野生動物にやられて作物や家畜を失った家、洪水や干ばつで作物や家畜を失った家——これらの家は繁栄しませんでした。不作のとき、彼らは裕福な家からお金を借りるしかありませんでした。そして、借金を返せないと、自分の土地を売り、小作人や下僕になるしかなかったのです。借金の型に子供を売ることもありましたが、最悪の場合は自分の身売って奴隷となりました。

土地を手放さねばならなくなった者は、買えるだけの財力のある者に、その土地を売りました。あるいは、借金の型に土地を手放すこともありましたが、金に困っている者はさらに困窮し、富める者はさらに土地を得て、ますます裕福になっていきました。最初に割り当てられたよりも多くの土地を持つものが出てくる一方で、土地を持たない者も出てきました。そうして、裕福な者と貧しい者が存在するようになったのです。

ヘブライ人たちが作った律法の詳しい例として、レビ記 25:23-28——「地は永代には売ってはならない」——が挙げられます。土地は、聖年(50年ごとのジュビリーの年)に、もとの所有者に返還されることになっていました。「そのときには、彼は…先祖の所有の地に戻るであろう。」(レビ記 25:41) この律法を考えた人々は、土地というものが、家族の暮らしと社会の安定の両方において必要不可欠であることを知っていたのでしょう。貧しい者が土地を手放さなくてすめば、あるいは取り戻すことができれば富める者も含めて、その国のすべての民にとって利益になります。

(ジュビリーの年には、土地がもとの所有者に返還されるとともに、貧困のため自らを労働力として売ったヘブライ人たちが解放され、土地そのものも休閑地として休ませることができました。日本には徳政がありました。小作人は借金の帳消し、免税、払うはずのお金を払わないで質入れした土地や品物を返すことなどを求めました。)

同様のことが日本でも、一度ならず起きています。8世紀の奈良政権は、農民への種籾の貸し出し(出挙)に35%もの年利を認めていました。返済が遅れ、利息が元金を上回り、小規模農家が破産して土地を失い、一家離散するケースもありました。

明治時代にも、物価の変動に対処しきれなかったり、生産性を高められなかった多くの農民が困窮しました。彼らは負債を抱え、土地を失い、小作人や労働者となりました。1827年には農民の30~40%がこうして土地を失っていた、と佐藤 信淵は述べています。(詳細については、佐藤 信淵、滝本誠一著『佐藤信淵家學全集 復刻』を参照のこと。)

ヘブライ人の家族がみな、同じ財産を持ち、同じ暮らしをしているうちは、富める者も貧しい者もいませんでした。しかし、富める者と貧しい者ができて、社会階層ができました。

考古学者で聖書学者のロラン・ド・ヴォーは、列王記上 14:17 に登場するテルザの村について、紀元前 10 世紀と紀元前 8 世紀の同じ村の違いを説明しています。紀元前 10 世紀の家屋は、どれも同じ大きさで、どの家族も同じような暮らしをしていました。しかし、紀元前 8 世紀になると、家屋の違いができました。裕福な家は大きくなり、裕福な家と貧しい家が異なる地域に建てられるようになっていったのです。

貧困の原因(2)——君主制の害

ソロモン王は貧困層の経済的負担を増やしました。12 部族がそれぞれ月ごとに宮廷を支える体制をとり、3 万人の労働者を徴集して巨大な建築物を作らせました。民は、王のために働くあいだ、自分の畑を耕すことができません。この賦役が大きな要因のひとつとなり、931 年にソロモン王が没すると、北部の部族が反乱を起こして、国は分裂しました。ソロモン王は多額の借金をしていたため、ガリラヤの 20 都市を外国の王に支払わねばなりません。変わらず同じ場所に住んでいるのに、ある日突然、べつの国の住人になっていた民は、どのように感じただろうかと思います。空き地はもとの所有者に返して、再配分することが法で定められていたにもかかわらず、それらの土地が王の所有とされて、王の配下の官僚に報酬として与えられました。

ソロモン王の出費のほかに、国内外でつづく戦争の経費もかさみました。

このとき、イザヤやエレミヤなど預言者たちが現れました。彼らは、民を不当に搾取しているとして、富める者、権力を持つ者を糾弾しました。そのため、富める者や権力を持つ者たちは、預言者をみな殺しにしました。

聖書の編纂

エジプトを脱してきた民がイスラエルに定住すると、司祭や聖職者たちが、イスラエルの民にとって重要な物語を集め、書き留めはじめました。それらがやがて、今日、「旧約聖書」または「ユダヤ教の聖書」として知られる書物になったのです。この書物は数百年の歳月をかけてできあがりしました——たとえば「創世記」は紀元前約 500 年によく書き終わっています。

「創世記」にどの物語を入れるか決めた人々は、前述の二種類の創世の物語を両方とも入れることにしました。神様は先に男を創ったとはされていない物語は、創世記 1: 26-27 にあります：

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。

さきに男を創ったのちに女を創ったとする物語は、創世記 2:7-23 にあります：

主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。(2:7-8)

主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。(2:15)

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。「ついに、これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これをこそ、女(イシャー)と呼ぼう。まさに、男(イシュ)から取られたものだから。」(2:18-23)

私の経験では、大半のカトリック信徒は、男が創られてから女が創られたとする物語は知っていますが、男女が同時に創られたとする物語は知りません。なぜでしょうか？

ところで、創世記における人間の創造に二種類の物語があるように、日本の神話にも幾通りかのバージョンがあるものがあります。古事記に記されている神話は、日本書紀に記されているものと若干違います。たとえば、古事記では、天照大神(アマテラスオオミカミ)はイザナギが左目を洗ったときに生まれたとされていますが、日本書紀では、イザナギとイザナミがともに天照(大日靈貴/オオヒルメノムチ)を生んだとされています。

神がモーゼに言った言葉——「それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい、『私は主(ヤハウェ)である。私はあなたがたをエジプト人の労役の下から導き出すであろう』(出エジプト記 6:6)——を思い返し、人々は、神が自分たちを自由にしてくれたと考えました。そのため、のちにエジプトから脱出した経緯を記したとき、解放へと導いたあらゆるできごとに、神の手が働いていたと見たのです。

十戒

人々は何世紀もの歳月を経るあいだに、自分たちの神は、肉体的な束縛に限らず、恐怖、疾病、罪悪など、人を縛るあらゆるものから解放にしてくれる神である、と理解するようになりました。彼らは、互いの自由を尊重し、自由な社会を創造するために必要なルールを、「十戒」として記しました。十戒を編纂したのは、民のなかの賢者や聖職者たちでしたが、その究極的な著者は神である、とヘブライ

人たちは理解していました。神が賢者や聖職者たちに啓示を与えて十戒を書かせた、と考えたのです。

彼らはエジプトを脱してすぐに十戒を記したのでしょうか、それとも、長年かけて十戒の物語を考え、のちに聖書の中に入れたのでしょうか？ おそらく、パレスチナに定住したのちに十戒を作ったのではないかと私は考えています。また一方で、エジプトで虐げられ苦しめられた経験が、彼らに、たとえば殺人や盗みは過ちである、と気づかせたのではないかと、とも思います。エジプト人に子供を殺されたときに受けた苦痛によって、彼らは、殺人が過ちであることを理解し、殺人のない社会を築こうとした——すなわち、「汝殺すなかれ」と戒めたのです。

当然、だれも殺さなければ、殺人は起きません。だれも盗まなければ、窃盗も起きません。ほかに神を持たなければ、自分たちをエジプトから導き出した神だけを崇拜し、その言葉に従うでしょう。この神が求める崇拜と服従は、十戒の遵守、すなわち生命と財産の尊重です。生命と財産を尊重することが、神を崇拜することなのです。神は私たちに、祭壇や像の前で頭を垂れることは求めません。神は、私たちが互いを尊重し合い、愛し合うことを望んでいるのです。

これはきわめて重要な点なのですが、誤解されていることがよくあります。神は、私たちが祈り、ミサに与ることを望まないわけではありません。ただ、神がもっとも望んでいるのは、私たちが互いに愛し合い、尽くし合うことなのです。

つづく数世紀のあいだに、いくつもの政変が起き、ほとんどのヘブライ人が離散しました。あとに残った者たちが、「ユダヤ人」と呼ばれるようになりました。これは、もともとあったヘブライ人の部族のひとつからとられた名です。

イエス

私はこれまでにオーストラリアと日本の教区で働いてきましたが、イエスがなにをし、なぜそうしたのかについて、大半のカトリック信徒がほとんどなにも知らない、という印象を持ちました。イエスを理解するには——彼がなにをし、なぜそうしたのかを理解するには——、当時のパレスチナの政治情勢を理解する必要があります。

紀元前 63 年、ローマ人が、現在イスラエルとなっている地を侵略し、植民地にしました。ローマ人は、ローマでの高い生活水準を維持するために、エジプトを脱してきた人々の子孫に重税を課しました。土地の総収益の約 2/3 が税として(地方政府を経てローマへ)送られました。多くの民が借金を負いました。あるとき、困窮した人々が、借金の記録保管所を焼き討ちしました。(日本では、農民たちが土地や税金の記録を焼いています。) こうした世情を背景に、イエスは生まれました。

貧しい者たちは、必要最低限の生活水準でようやく暮らしており、干ばつ、借金、疾病、死などによって土地を追われれば、小作人になるか、さらに落ちぶれた生活をするしかありませんでした。

サドカイ派の人々のように、ローマ人に協力する者もいました。彼らは、先祖代々つづく貴族階級であり、裕福であったため、ローマ人と諍いをしたくなかったのです。サドカイ派は、当時存在した 4 つの主要部族のひとつでした。パリサイ派はローマ人に敵対し、神権政治を目指しました。エッセネ派は紀

元前 150 年頃に神殿司祭職から離脱した反体制派の司祭たちで、世間から離れて清浄な集団生活を送りながら、神によるイスラエルを解放を待っていました。

そして、このほかに、ローマに攻撃をしかけるゲリラ戦士たちもいました。

ここに、預言者である洗礼者ヨハネが現れました。ヨハネはサドカイ派とも、パリサイ派とも、エッセネ派とも異なっていました。彼は厄災を預言し

ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大量、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。」(マタイ 3:7)、

悔い改め、社会道徳を守るよう——十戒を基盤とした生活に戻るよう——呼びかけ

そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。(ルカ 3:10-14)、

大規模な社会運動を起こし

そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、(マタイ 3:5)

そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。(ルカ 3:7)、

悔い改めたしるしとして人々に洗礼を授けました。彼は神殿を無視し、司祭たちが決めた「罪を赦される方法」——代償を払う——を無視し、神殿を離れて、無償で洗礼を授けました。

ヨハネはなぜ、悔い改めよ、と説いたのでしょうか？ ヨハネは、この国が窮状にあるのは、ヘブライ人たちが互いの権利を尊重せず、十戒を守らないためである、と考えていました。そのため、罰を受ける、大惨事が起こる、と預言したのです。

ヨハネが活動をはじめたまもなく、イエスが現れました。イエスはヨハネから洗礼を受けようとしてきました。ヨハネも、これには違和感を覚えました。

ところが、ヨハネは、それを思いとどませようとして言った。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」(マタイ 3:14)

でも、ヨハネの現状理解が正しいと考えたからこそ、イエスは洗礼を受けることを選んだのではないかと私は思います。

のは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」(マタイ 9:10-13 ほか)

これは、イエスのふたつめの決断です(ひとつめはヨハネに洗礼を受ける決断)。

ヨハネは、個々の人に悔い改めるよう(変わるよう)説き、神の介入を待ちました。イエスは、社会を変える必要がある、と考えました。ヨハネは神(が社会を変えるの)を待ち、イエスは、神は私たち(が行動して社会を変えるの)を待っていると考えた、と言ってもいいでしょう。イエスは——暮らし方も含め、自分たち自身を変えることによって——社会を変えるよう、人々に働きかけたのです。

大工の家に生まれたとすれば、イエス自身が農民より下の階級に属していたことになります。イエスは、ようやくなんとか生きていけるような、最低水準の暮らしをしていたのです。福音書は、イエスが都市部よりも田舎で主に活動していたように描いており、イエスとその弟子たちを、住む家のないさすらい人のように描いています。

貧しい人々は、神殿に生け贄をささげる金銭的余裕がなく、そのために罪人として扱われ、宗教行事や社交行事から排除されました。イエスが貧しい人々や見棄てられた人々とともに過ごしているのを非難されていることから、当時の社会のリーダーたちの少なくとも一部が、そうした行為を認めていなかったことがわかります。

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いました。(ルカ 15:1-2)

イエスはなぜ、このふたつめの決断をしたのでしょうか？ それは、貧しい者、病める者、罪を犯した者を、あわれんだからです。

群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。(マタイ 9:36)

イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた。(マタイ 14:14)

イエスは罪を赦しました。当時は、ある者が罪人かそうでないかが決まっており、そのどちらであるかを、みなが知っていました。

(日本にも「罪人」とされた人々がいました。「穢多(えた)」や「非人(ひにん)」は、多くの場合、神社や寺へ足を踏み入れることを禁じられました。神社に入ろうとしたその種の人々が殺されたとき、「一人の穢多の命は、一人の町人の命の 1/7 の重みしかない。7 人の穢多が殺されたのでないかぎり、一人の町人を罰することはできない」、と徳川幕府の役人は言ったといえます。)

イエスに「あなたの罪は赦された」(ルカ 7:48)と言われた人々が、自分の罪が赦されたと信じた、という話が、私には納得できませんでした。人々はなぜ、このような貧しい宿無しの言葉を信じたのでしょうか？ 宗教的権威は、神殿でなんらかの儀式をおこなわなければ罪は赦されないと教えていましたが、イエスはこの条件を無視しました。

イエスは病める者を治癒しました。当時、病は罪に対する罰と捉えられることが多く、病める者は罪人と考えられ、さまざまな方法で排除されていました。したがって、病が治癒されるということは、肉体的・精神的な治癒以上の意味を持っていたのです。イエスは彼らを辱めから救い、社会に復帰できるようにしたのです。実際、イエスがおこなった治癒や奇跡はほぼすべて、社会的関係の再編、したがって、社会的秩序の再編でした。

イエスがおこなったもうひとつ重要なことは、人々に神について教えたことです。

そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。(マタイ 4:17)

イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。(マタイ 4:23)

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。(マルコ 1:14-15)

イエスは、神が世界を統べる日は近い、と説きました。イエスは人々に、この「御国(みくに)」に連なるためには、どのように暮らせばよいのかを教えました。金、権力、地位について、どのように対処すべきかが、その教えの中心でした。イエスにとっては、これらが、個人の高潔と公正な社会を妨げる主な障害でした。イスラエルで貧困が生じた原因は、金、権力、地位を求める欲望でした。(今日の教会が出しているさまざまな文書を読むと、もっとも深刻な罪は性に関するもの——墮胎、婚前交渉、同性愛、離婚など——である、という印象を持たれるかもしれませんが、でもイエスは、こうした事柄についてはほとんど語っていません。したがって、この分野については、教会の焦点がイエスのそれからずれてしまっているように思えます。)

イエスはその弟子たちに、すべての人の僕になるよう教えました。

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食のときであった。。。イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。

シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。

さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。(ヨハネ 13:1-15)

一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」(マルコ 9:33-37)

そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」(マルコ 10:42-45)

「御国(みくに)」はこの世で実現される、という点は重要です——それは天国とは違うのです。イエスにとってそれは、政治的に構築された、この地上にある人間の社会であり、もし神が王座に就いたなら、あるいはホワイトハウスの住人になったなら、このような世界が訪れる、というものだったのです。イエスは人々がそう信じるように、そのように生きるように——いますぐにでも——働きかけました。

イエスは最初の弟子たちに、人々が彼らのもとに来る場所となるような活動拠点を作るように、とは言いませんでした。それは組織主義のはじまりです。イエスは組織化のきっかけを与えません。彼が語っているのは、活動についてです。私たちは(人々が自分たちのところへ来るのを待つのではなく)、こちらから人々——とりわけ貧しい人々——のところへ行くように、と彼は説いています。

イエスのもとにはやがて、弟子たちが集まり、大きな運動に発展していきました。イエスは特別な人だ、と人々は考えはじめましたが、その一方で、身内の中にも彼を疑う者がいました。マルコによる福音書は、イエスの身内が、イエスは気が狂ったと思った、と記しています。

身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。(マルコ 3:21)

幾人もの男たちが家族も職も捨てて彼に従ったのだとすれば、そして、「あなたの罪は赦された」という彼の言葉を人々が信じたのだとすれば、イエスは非常にカリスマ性のある人物だったはずで

ここで、マッキの言葉が理解の一助になると私は思います。

イエスの信仰は、彼が生きた信念——大も小も生きとし生けるものはすべて、とりわけ人間はひとりひとりがみな、神が愛しんだように愛しむべき、神から恵まれた宝である、という信念——です。イエスで注目すべきは——神が「神の子供たち」、とくに社会に見棄てられた人々を受け容れ、彼らを晩餐の席につかせて、彼らが本当に必要としているものを与えたように——接したすべての人を受け容れたことです。イエスという人は、私たちと同じように、自分に与えられたもの以外はなにも持たず、なにもないところから身を起こしました。イエスの生涯そのものが、そして、その生涯の中で彼に与えられたものはすべて、恵みでした。イエスは惜しみなく与えられ、人々に惜しみなく与えました。自分の生涯そのもの、そして、その生涯で出逢ったすべてのものを——尊い贈り物を受け取るように、やわらかく繊細な糸をそっと持つように——「恩寵」として受けたのです。その糸は、引っ張って切ってしまうことなく、たぐり寄せることができれば、人をその根源に近づけてくれるのです。

イエスの生涯のなかで、恩寵がもっとも顕著に現れるのは、その死です。すべては恩寵であり、神はすべての人に恵み深い、という信仰・信念を、イエスはその生涯を通して示したのです。イエスはこの信念の証拠として、その実現に必要な寛容の精神と奉仕に、その生涯を費やしました。その生きた信念が、社会の権力構造を脅かすようになったとき、その構造を司る者たちは——人々に平安をもたらすにはそうする必要であると信じて——イエスを処刑すべきだと判断しました。そしてイエスは、その信仰・信念を示す最後の完全なる行為として、自身の命を与え、そうすることによって、自身が生きた恩寵の信念を完結させたのです。彼はそのようにして、生きた信念はかならず地上で実現し得ることを、最大の力、至上の靈感を与える潜在力、もっとも実効のある精神をもって示したのです。

パウロは、私たちが救う神の恩寵について多くを語っています。世界のあらゆるものから真の意味で恵みを受け、その限りない喜びと苦しみ、その恵みの中に生きることができれば、貪欲に求め、渴望し、引き裂き、誇示せんとする、人生を破滅させるさまざまな欲を乗り越えることができます。私たちが信仰を持って、それを「受け取る」ことができれば、そして、イエスの信仰——私たちに靈感を与えることによって、彼が私たちに示した——によって、あらゆる命と存在を神の恵みとして見るようになることができようになれば、また、あらゆる命と存在から恵みを受けることができるようになるれば、それは実現し、同時に、他者に恵みを与える力を私たち自身も持てるようになるでしょう。（詳細については、ジェームズ P. マッキ著『Jesus』を参照のこと。）

イエスを預言者だと思った人たちがいました。ローマ人たちを追い払い、イスラエルを解放してくれる人物だと思った人もいました。おそらくそのために、ローマ人たちはイエスの処刑を決めました。

ここからが難しい部分です。なにが起きたのか、私には確かなことはわかりません。そして、私が推察する内容は、読者に不快を与えるものかもしれません。

イエスに選ばれたはずの弟子たちの、全員とは言わないまでもほとんどが、イエスが逮捕されたとき、イエスを残して逃げ去りました。イエスが処刑されたのち、彼らはさまざまなかたちでイエスの存在を体験し、逃げてしまった自分たちを、イエスが赦したことを知りました。その体験が、彼らを永遠に変えました。イエスが逮捕されたときに逃げ、隠れていた弟子たちは、そのときから突然、自分たちを率い

てくれたイエスを逮捕し処刑したその権力者たちに向かって、説教をする勇気を持てるようになったのです。彼らはイエスが死から甦ったと語り、説明し難い体験をなんとか説明しようしました。(あるシスターが話してくれたのですが、親友が亡くなったとき、彼女はその存在とその愛を、まざまざと肌身に感じる事ができたそうです。)

復活とはどのようなものか、という先入観が、私たちが書物を読むとき、そこに記された内容を読み取りにくくしている、とマッキは言います。

パウロにとって「イエスは甦った」と語るということは、イエスは「命を与える精霊」である——信仰、希望、愛のように、私たちが暮らしの中ではっきりと感じとることができる、破壊をもたらす悪を乗り越えさせてくれる精霊——と語るのだ、とマッキは述べています。マッキはさらに、新約聖書におけるイエスの復活は、イエスという人の神話である、とも述べています。神話とは、私たちを世界や同胞とつなぐ重要な絆、生死に関わることがら、怖ろしい曖昧さ、存在の不確実性が明確になる深部まで、私たちの意識をもっていく物語です。復活が神話ならば、それは私たちに、人間の幅広い視点や表現の中でそれが機能する一点について、なにかを教えてくれるものなのであり、それが正しいか間違っているかを問題にすべきものではないのです。

使徒言行録は、イエスが呼びかけていたような生活を、弟子たちが送るようになったことを記しています。彼らの説教やその暮らし方は多くの人々を惹きつけ、キリスト教は西アジアへ、そしてヨーロッパやアフリカへと広がっていきました。

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業と行われつつ行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。(使徒言行録 2:44-46)

イエスの重要性をめぐっては、歳月を経るあいだに、いくども論争が起きました。キリスト教徒コミュニティ(教会)は、たいていは評議會を招集することで——もっとも最近では第 2 バチカン公会議——こうした論争を和解へと導き、そうする中でイエスについての理解を深め、信仰の重要事項を守るための教義を作り上げていきました。

神学者のオスカー・クルマンは、彼らの信仰はいくつもの段階を経て成長していった、と述べています。初期の弟子たちは、イエスを「教師」または「預言者」と見ていました。その後、イザヤ書に記された「神の苦しむ僕」と見るようになり、それから「司祭長」と見るようになり、さらに、ユダヤ教徒が待ち望む「救世主(メシア)」と見るようになりました。そしてさらにそののちに、「人の子」、「主」、「救い主」、「神の言葉」、「神の子」などを経て、「神」そのものと見るようになっていったのです。

したがって、弟子たちは、イエスの存命中は、彼を「神」とは考えていませんでした。ユダヤ教徒たちは、神は唯一であると考えていたため、イエスを神と信じられなかったのです。イエスは神であるという信仰は、時間をかけてゆっくりと芽生えていったものなのです。

聖書の正典の形成

キリスト教徒たちは、さまざまな国に移り住み、各地にコミュニティを形成していきました。各地でそれぞれが、自分の知るイエスの物語を伝えたのです。語る人によって、物語にバリエーションが生まれました。イエスを直接知っていた弟子たちが一人また一人と死んでいくと、キリスト教コミュニティは、イエスに関するすべての物語を書き留めておかなければ、それらが永遠に失われてしまうかもしれないことに気がきました。聖書に複数の福音書があるのは、そのためです。また、初期の教会が新約聖書に入れなかった福音書や手紙がほかにもありました。

教会は、これらの書が、神の啓示を受けて書かれたものだと考えています。(そのほかの書が、神の啓示を受けていない、という意味ではありません。新約聖書に入れた書だけで、イエスのことを十分に伝えられると教会が考えた、という意味です。)

キリスト教徒たちは、ローマの神やローマ帝国を信じなかったため、迫害されました。土地を所有することができなかった(わずかな例外はありましたが)彼らは、家々で集まり、迫害される心配のないときは、公の場で集まりました。4世紀にコンスタンティヌス大帝がキリスト教を公認し、自らもキリスト教徒になり、迫害をやめさせました。大帝は資金を拠出して、バジリカ式——長方形の建物で、片側の床面が高くなっており、儀式の際に使われた——の公会堂も建設させました。バジリカ式の建築は、そこでおこなわれる儀式に参列するよりも、むしろ見物するのに適した形状でしたが、その後、教会の建築様式の主流になっていきました。

司教たちは教養があり、民から尊敬されていたため、コンスタンティヌスは彼らに、民事訴訟で裁判官の役割を果たす権限を与えました。そして、ローマの習慣に従って、階級を示すケープ、冠、靴、指輪なども与えました。聖職者が一般の民と違う服装をするようになったのは、このときからです。

379年に即位したテオドシウスは、キリスト教をローマ帝国の国教としました。

「4世紀におけるローマ帝国の大規模な改宗、5世紀におけるキリスト教徒の幼児洗礼、6世紀にはじまったゲルマン民族の集団洗礼は、多くの人が、信念ではなく習慣から典礼に参列していたことを意味している。」「人々が信念から教会に加わりたいと願ったのか、それとも便宜のためにそうしたのか、よくわからないことがあった。改宗する人が増えるにつれて、準備期間も説教の時間も短くなっていった…。」(詳細については、ジョセフ・マートス著『Doors To The Sacred』を参照のこと。)

しかも、キリスト教徒は異教徒を迫害するようになりました。彼らは寺院を破壊したり、教会に変えてしまったりしました。

帝国が衰退していくと、人々は教会にリーダーシップを求めるようになりました。教会は、ヨーロッパでもっとも力のある組織になっていきました。その一方で、腐敗や墮落なども起こり、さまざまなかたちで衰退もしていきました。教会は過ちも犯しました。

読み書きのできない人々への布教もあり、問答集(カテキズム)が重視されました。キリスト教はやがて、イエスの復活の体験ではなく、教義を信仰する、むしろ「威圧的で激しい」宗教になっていったのです。

教会は、キリスト教が唯一の真の宗教であり、キリスト教徒だけが天国に行くことができる、と信じていました。したがって、そのほかの宗教はすべて間違っており、有害でさえある、と信じていました。十戒が「殺すなかれ」と戒めているにもかかわらず、また、イエスが「互いを赦し、汝の敵を愛せよ」と説いているにもかかわらず、教会は、「真の宗教」を守るために、「誤った宗教」を破壊する使命が自分たちにはある、と考えてしまったのです。他の人々を迫害し、殺した教会は、自らの教えに背いたこととなります。この点で、教会は神とイエスに背いていた、と認めることが重要であると私は思います。

黒死病(ペスト)

1347年から1349年にかけて、ヨーロッパの人口の1/3近くが死にました。当時は病原菌というもの知識がなかったため、死因としてまず考えられたのは倫理的な要因でした——世界が悪に染まったため、その罰を受けているのだ、と人々は考えたのです。そこから、この世で創造的に生きるよりも、この世を離れて罪をあがなうにはどうしたらよいか、という発想が主流を占めるようになりました。リバイバリスト(信仰復興論者)が現れ、死、最後の審判、天国と地獄などについて説教するようになったのは、このときです。人々は悲しみに対処する方法として、「時間」を逃れて、「永遠」の世界を求めました。ペストは深い傷跡を残し、「自然界に対する強い反感」をもたらし、それ以来、これが「西洋文化の伝統に色濃く刻まれる」ことになったのです。

中世における科学の進歩

古代の人々は、太陽が東の地平線から昇り、西の地平線へ沈むのを見て、太陽は地球のまわりをまわっているのだと考えました。のちに聖書となる物語を創った人々は、太陽が地球のまわりをまわっていると信じて、昇って沈む太陽について語りました。それから時代が進み、聖書は靈感に満ちた神の言葉であると考えられるようになると、キリスト教徒たちは、太陽が昇り、沈むという描写にも、神の靈感が宿っており、したがって、正しいのだと信じるようになりました。

中世になり、望遠鏡を発明した科学者たちが、宇宙について重大な発見をしました。太陽ではなく、地球のほうが太陽のまわりをまわっていることに気付いたのです。これは、聖書を否定するもの(たとえば創世記 15:12 の「日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。」などの記述)のように思われました。聖書は神の靈感を受けた書であり、したがって、正しい、と信じていた教会の権威は、科学者たちの言葉を否定し、非難しました。哲学者で科学者のジョルダン・ブルーノは、検邪聖省の異端審問によって、1600年に火刑に処されています。

科学者たちは自然界を研究し、さまざまな成果を挙げていました。しかし、多くの科学者が、現実の世界はすべて、望遠鏡や顕微鏡、数学によって、同様に解き明かすことができる——そうして測定できるものだけが「現実」である——と結論してしまったのです。これは科学者たちの過ちでした。教会は、科学の前向きな進歩と過ちを区別することができず、躊躇することなく、科学を全面的に否定しました。これは教会の過ちでした。

当時の教会は一般的に、個人も政府も、不朽の神聖な法——カトリック教会が、その唯一の守護者

であり、解釈者である——を究極的基盤とする、唯一不変の司法制度の支配下にある、と考えていました。こうした世論のもとでは、科学も含め、いずれの人間活動分野における革命も、教会の教えと一致することが示されない限り、たちまち脅威と見なされました。

前述のように、教会はその内部にも問題を抱えていました。枢機卿、司教、司祭の責任領域からの慢性的不在、教区司祭の教養水準の低下、恩恵や特免の乱発、聖職者による飲酒の放任などです。1545年、教皇パウロ3世がイタリアのトレントで評議会を召集しました。評議会が最優先で取り組まねばならない課題は、聖職者の規律を回復し、明確な神学を提供することによって、信徒たちになんらかの安心感を与えることでした。やがて実際の改革にもつながっていきましたが、この新しいイニシヤティブは、子細に渡る強迫的支配の空気、評議会、教会会議(シノドス)、神学者による果てしない教義論争、逸脱の疑惑、社会的に対立する分野における柔軟さのない律法主義的措置への傾倒など、負の遺産を生み、これが今日までつづいています。

大きな影響を与えた三人の科学者——フランシス・ベーコン、ルネ・デカルト、アイザック・ニュートン

教会が科学者の発見を否定し、彼らを迫害するなかで、教会や宗教に幻滅する科学者たちがでてきたのは当然でしょう。

英国人のフランシス・ベーコン(1561-1626)は、人間の知能の主たる目的は、自然を理解し、支配することである、と考えました。フランス人のルネ・デカルト(1596-1650)は、物理的世界と精神を、完全に異なるふたつの世界に分けました。生物世界の内なる生命力、非人間世界における魂の感覚、という西洋の思想を、たったの一撃で退けたのです。英国人アイザック・ニュートン(1642-1727)は、宇宙は巨大な機械的構造であり、それを理解するためには、機械のように各パーツをひとつひとつ切り離して検証すべきである、と考えました。こうした視点は、科学界や、世界に対する私たちの姿勢に、今日も影響を及ぼしつづけています。人間が自然を支配すべく定められているならば、私たちが巨大なダムを作ったり、動植物の遺伝子を組み換えたりして、環境を変えてしまってもいい、という考えになるかもしれません。そして、物理的世界と精神が、本当にふたつのまったく異なる世界であるならば、当然、精神のほうが重要ということになり、私たちが物理的世界に対してやることは、それほど重要ではない、ということにもなるでしょう。もし、宇宙がただの巨大な機械的構造であるならば、車のエンジンやコンピューターを扱うように扱ってもいいのではないのでしょうか？

こうした考え方が西洋で主流を占めつづけ、やがてペリー来航とともに日本へやってきました。

(私はよく、ハイキングをしていて、辺鄙な場所で祠(ほくら)を見つけることがあります。先人たちが自然に対する畏敬の念——日本人が西洋に追いつこうとする中で忘れてしまった畏敬の念——を表すために残したもののなのではないでしょうか。私たちも、教会や修道院、学校や病院に、祠を作ったらいいかもしれません。)



別世界的で超越的なキリスト教——カトリックとプロテスタント——の思想は、科学の客観的方法論を、自然界の支配に適した手法として受容しました。宗教と倫理、律法と政治、科学、教育、医学を含む近代西洋の文化伝統はすべて、人間による自然界の支配を支持してきました。リン・ホワイトのような学者が、キリスト教は人間による自然破壊に重大な責任がある、と論じているのは、このためです。

とりわけ工業・商業界や、国内・国際規模の巨大企業が、こうした人間による自然界の支配というスタンスをとっています。京都での決定に影響を及ぼすために、業界ロビイストが大勢集まったのは、そのためです。

科学の進歩

20 世紀における科学の進歩により、宇宙は機械であるという考え方は覆されました。複雑な銀河系を全体として捉える視点が、現代物理の重要な基盤のひとつとなっています。科学界は、私たちが存在する物理的宇宙と、その機能の完全な解明に——キリスト教と完全に調和するかたちで——向かっています。

ブライアン・スウィムやエリザベット・サトリウスのような科学者や、神学者で司祭のトーマス・ベリー (1914-2009) は、生命を機械のパーツでできたものとは考えませんでした。非生物である惑星のあちこちにあった分子が偶然集まって生命体ができあがり、それらがさらに集まって生態系を形成したのではありません。そうではなく、惑星系そのものが生物として代謝するようになり、惑星や恒星間の巨大なエネルギーの流れの中でますます生命力を増してゆき、その地殻物質の中にさまざまな生物を内包するようになり、これらが変化しつづける独自の環境を構築しているのです。

彼らは、宇宙そのものが進化しつづける生物のコミュニティである、と考えており、なんらかの知的反応が最初から宇宙に潜在していた、と考えています。フリーマン・ダイソンは、**宇宙は最初から、私た**

ちが来ることを知っていたはずである、と述べています。彼らにとって、地球は生命体です。その証拠に、太陽の熱量が増えつづけているにもかかわらず、地球は自身の温度を管理できている、と彼らは指摘します。

サトリウスはさらに、私たちが自然を守ったり管理したりしようとするのは間違いだ、とまで言っています。人間がいてもいなくても、地球は自分自身を守ることができる、というのです。私たちの悲惨なほど知力を欠いた介入は、惑星を滅ぼしはしないまでも、種としての人類を絶滅させかねません。

これらの科学者たちは、「私たちは覚醒した宇宙である」と考えています。——「つまり、私たち自身が宇宙の意識である、という意味である…。自分自身を理解する最初の一步は、宇宙の物語を自分の基礎を成す真実と理解し、賛美することである。この一步を、軽んじてはならない。これまで長きにわたり、多くの人々が、この地球では持続不可能な、大量消費・生産主義的生活を送ってきた。私たちの自己理解の欠如が、宇宙に負荷をかけてきたのである。私たちの暮らし方は、地球に属することを否定するものであり、人類の現状が有限であることを認めていない。それは、人間が有するという崇高な精神性を、損なうものである。」

「私たちは覚醒した宇宙である。」それは、私たちが宇宙について考える、ということではなく、宇宙そのものが——私たちの中で、また、私たちを通して——考える、ということです。私たちは宇宙の一部です。宇宙は私たちよりも大きい。宇宙の問題は、人間の問題よりも重大です。「宇宙そのものが、主たる神聖なコミュニティなのです。」私たちは、人間中心から宇宙中心へと、考え方を変えねばなりません。

サッカーチームの選手たちは、個人の欲求よりもチームのことを優先し、チームのために犠牲を払います。(そうしない者は、チームに長くはいられません。) ひとりの選手がゴールを決めることよりも、チームが勝利することのほうが重要です。戦時、市民は自分よりも自国のことを優先し、そのために犠牲を払います。国が戦争に負けてしまえば、ひとりひとりの勇気ある行動も無に帰します。私たちは、ひとりひとりがみな、宇宙というチームの一員であるということを認識し、自分よりも宇宙を優先し、犠牲を払わねばなりません。たとえ金持ちになったとしても、そうなるために地球に害を及ぼしていれば、無意味なのです。

私たちの宇宙は、ある意味で、そこにかかわるものたちが参加することによって成り立っています。それは、互いに手を携えた「踊り」であり、「参加すること」がその組織的原理です。敵対する社会の中で、厳しい自然に囲まれて、生き残るために競い合わねばならないと考えるのは、もはや無用です。私たちが自分自身のことを、そのような競合状態にあると考えるのは、必然からではなく、西洋の科学が、こうした思想を歓迎する社会的・政治的伝統と密接な調和のなかで発展してきたからなのです。

聖書解釈の進展

18 世紀、19 世紀になると、学者たちが聖書の上辺の間違いに気付きはじめました。たとえば、申命記 24:1 とマルコによる福音書 10:11-12 の記述は矛盾しています。神の靈感を受けた書である聖書に、間違いがあつていいのでしょうか？

人が妻をめとり、その夫となつてから、妻に何か恥すべきことを見だし、気に入らなくなつたときは、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせる。(申命記 24:1)

イエスは言われた。「妻を離縁して他の女を妻にする者は、妻に対して姦通の罪を犯すことになる。夫を離縁して他の男を夫にする者も、姦通の罪を犯すことになる。」(マルコ 10:11-12)

1902年に教皇レオ13世が、すべて枢機卿で構成される教皇庁聖書委員会を立ち上げました。委員会は、たとえば創世記1-3は逐語的および歴史的に解釈すべきであるなど、聖書の記述を擁護する決議を發布しました。それはつまり、アダムとイヴの子供たちが互いに婚姻を結んだことを意味するようによろしく見えます。

解釈の難しい記述は、ほかにもあります。たとえば詩篇137:8-9です。

主よ、覚えていてください。エドムの子らをエルサレムのあの日を
彼らがこう言ったのを
「裸にせよ、裸にせよ、この都の基まで。」
娘バビロンよ、破壊者よ
いかに幸いなことか
お前がわたしたちにした仕打ちを
お前に仕返す者
お前の幼子を捕えて岩にたたきつける者は。

神が靈感を持って、このような言葉を発したとは思えません。

今日、私たちは地球のほうが動いていることを——すなわち、太陽が動いている、という聖書の記述は厳密さを欠くことを——知っています。でも、そのことで、聖書が神の靈感を受けた書であることや、その啓示を疑ったりはしません。私たちは、聖書について語るとき、神の靈感がなにを意味するのかについて、自分の中でその定義を修正して解釈しています。私たちは今日、聖書における神の靈感の教義が意味するところは、聖書に書かれていることがすべて、そのまま真実であるということではなく、聖書はあくまでも、神を顕かにしているに過ぎないのだ、と理解しています。

聖書学の助けを借りて、教会は長い時間をかけて、少しずつ聖書のルーツに戻りつつあります。教会会議(シノドス)は1971年に、「正義のために行動することが。。福音宣布の本質である」(『世界の正義』)と述べています。

この30年間で、「貧者のための優遇的選択肢」というフレーズが、全宗教組織の86%で使われるようになりました。

教皇ヨハネ・パウロ2世は、次のように書いています。

世界の各地で、各国で、国と国の間で社会正義を実現するために働く人の連帯、そしてまた、働く人との連帯のいつも新しい運動が起こってくる必要があります。働く主体が格下げされ、働く人が搾取されたりすることのため、貧困と飢えの地域が拡大していくことのため、

このような連帯が求められる時はいつも手の届くところにはなりません。この共通の戦線のため、教会は身を引くことができないほどしっかりかかわっていかなくてはならないと自覚しています。教会にとってそれは使命であり、奉仕であり、キリストへの忠実の証拠であって、こうしてこそ教会は真に「貧しい人の教会」になれます。

——（教皇ヨハネ・パウロ二世、回勅『働くことについて』#8）

これは、三千年以上も前に出エジプト記で最初に明かにされた解釈、そして、自身の使命に関するイエスの理解に立ち返るものです。

最近になって、教会はようやく、生態系の危機に目を向けはじめました。教皇ヨハネ・パウロ 2 世とベネディクト 16 世が、環境についてさまざまな発言をしています。二人の発言をいくつか挙げます。

「次第に減少するオゾン層、それに関連する“温室効果”は、工業の発展、大都市の人口集中、はなはだしく増大したエネルギー需要の結果によるもので、今や危機的状況に達しました。」#6

「現代社会の生活様式を真剣に反省しないかぎり、環境問題に対する解決を見いだすことはできません。」#13

「簡素、慎ましさ、節制、犠牲の精神などが 日常生活の一部とならなければ、一部の人の情性が引き起こす事態ゆえに全人類が苦しむことになるでしょう。」#13

——「創造主である神とともに生きる平和、創造されたすべてのものとともに生きる平和」（ヨハネ・パウロ 2 世、1990 年「世界平和の日」教皇メッセージ）

もし心から平和を望むなら、人類は、自然環境の保護、あるいは自然の尊重と、「人間のための環境保護」の間のつながりをますます意識しなければならないのです。経験が示すとおり、環境をないがしろにする態度は、必ず人間の共存にも損害を与えます。また、人間の共存をないがしろにする態度は、必ず環境にも損害を与えます。被造物との平和と人間どうしの平和の間には切っても切れないつながりがあることが、ますます明らかになってきています。

——「平和の中心である人間の人格」（ベネディクト 16 世、2007 年「世界平和の日」教皇メッセージ）#8

環境悪化が、多くの場合、長期的な視野に立った公共政策の欠如や、近視眼的な経済的利益の追求に起因するのは、容易に分かることです。悲しむべきことに、それは被造物に深刻な損害を与えます。このような現象に立ち向かうために、経済活動においては「あらゆる経済決定は道徳的結果を伴う」ことを考慮する必要があります。こうして環境をますます尊重しなければなりません。

——「平和を築くことを望むなら、被造物を守りなさい」（ベネディクト 16 世、2010 年「世界平和の日」教皇メッセージ）#7

地球、その存在そのものが我々に語りかけます。それに耳を傾けることを私たちは学ばなくてはなりません。

神によって秩序と調和に満ちて創造された世界を人はもっと敬わなければなりません。私

たちが生き残るためにはこの定めを知り、それに従わなければなりません。今ある欲望に溺れることなく、大地の声にもっと従順になることが、私たちの明るい未来のために不可欠です。

——(ベネディクト 16 世、ベッルーノ・フェルトレ教区とトレヴィーソ教区の司祭達との会合、聖ユスチノ殉教者の教会にて、2007 年 7 月 24 日)

ベネディクト 16 世は、発言するだけでなく、行動も起こしました。ヴァチカンには、パウロ 6 世謁見の間の屋根に 1,000 以上もの太陽電池パネルを設置しました。建物内の照明、冷暖房などは太陽電力で賄われることとなります。それで、ヴァチカンはヨーロッパで二酸化炭素を全く排出しない初めての国となりました。そして、年間に自ら排出する二酸化炭素を吸収するのに必要な規模の再植林を、ハンガリー・ブック国立公園にするとハンガリーの会社と契約を結びました。

結論

イエスを再発見し、宇宙の物語を発見することにより、私たちは難しい選択を迫られています。イエスは、イスラエルの民がふたたび真の意味で神を崇拝する——正義の行為——ようになることを望み、社会の秩序を再編するための大いなる社会運動をはじめましたが、何世紀もの歳月を経るうちに、私たちはこのことを見失ってしまい、個人の精神性——日々の祈り、日曜の礼拝、告解——がキリスト教の教義の実践の中心になってしまいました。ローマ教皇や司教たちは、イエスが貧しい者たちを愛したことを忘れ、権力者と手を携えて政治に関与しました。私たちの多くが、いまだその束縛を逃れられていません。教会はいまだに、大使館のみならず、国家まで有しています。ローマ教皇や司教たちはいまだに、コンスタンティヌス時代からの衣裳を身につけています。(教会が政教分離を真剣に考えたことがある、とは考えにくいのが現状です。)

(1963 年 11 月、ローマ教皇パウロ 6 世が、サンピエトロ大聖堂の祭壇に教皇冠を置き、世俗的権力の保有を全面的に放棄することを、へりくだった姿勢で象徴的に示しました。教皇は二度と、その冠をつけることはありませんでした。1967 年にはヨハネ・パウロ 2 世が、教皇が持つ金の指輪をブラジルの貧しい教区に与えています。)

地球の資源には限りがあります。全世界が私たちのような暮らしを送るには、資源が足りません。先進国といわれる国々による資源の乱用が、貧しい国々による資源の使用を妨げ、地球温暖化を引き起こし、地球を汚染しています。正義を実践したいならば、そして、貧しい人々にもよりよい生活を送る権利があると考えれば、彼らも資源を使うことができるように、私たちは資源の使用を減らさねばなりません。

多くのキリスト教徒の学者たちのように、宇宙の物語は神の物語でもあると信じるならば、そして、宇宙の物語は新たな神聖なる啓示的体験であると信じるならば、私たちは地球を愛しなねばなりません。地球のこれ以上の温暖化を食い止めるには、私たちは化石燃料の使用を止めなければなりません。いま、私たちの信仰が試されているのです。私たちは、より簡素な暮らしに変える——喜びをもって簡素な生活を送る心構えが、できているでしょうか。車に乗るのを止め、飛行機に乗るのを止める心構えが、できているでしょうか。エアコンを使うのを止め、食品輸入を食べるのを止める心構えが、できているでしょうか。(いまや食品の 60%が輸入品です。なぜ日本人は日本食をあまり食べないの

か、私は不思議に思うことがあります。日本食になにか問題でもあるのでしょうか？ それとも、農家の腕が悪いとでもいうのでしょうか？)

米国人のフランシスコ会修道士、リチャード・ロアは、簡素な生活を提唱しています。「私は将来的な倫理観が、宗教からではなく、概して土地から生じると考えている。それに、正直に言って、辱めや十戒は、これまでたいした効果を挙げてこなかった。地球そのものが私たちに、簡素に暮らすべし、敬虔に暮らすべし、ともに生きるべし、と教えてくれるのだ、と私は考えている。」

こうした変化は、一般のカトリック信者たちには(そして、多くの司祭や司教たちにも)、まだ伝わっていません。地球の環境問題は、教会が——教区レベルでも、小教区レベルでも——まず取り組むべき、最優先の課題でなければなりません。教会で貧しい人々を助けるため慈善コンサートやバザーがよく行われます。いいことです。しかし、貧しい人々はなぜ貧しいかを考えないと行う意味はありません。本当の意味で貧しい人々を助けるためには貧困の原因を根本的に解決しなければなりません。私たちにも責任があるため私たちの生き方、また国や企業の政策を変える必要があります。同じように環境破壊と気候変動・温暖化のためにも自分の責任を忘れてはいけません。回心が必要です。

また、地球には限界があります。作物の収穫量も限られていますし、地球に生きられる人口も限られています。このことを豊かな国々は未だに認めていません。大気が処理できない沢山の温暖化ガスを排出しています。この限界を認めるためにも回心が必要です。

典礼のサイクルについても、やらねばならないことがあります。これは、宇宙が不変だと考えられていたときに作られたものなので、反復的で進展がありません。環境のための典礼、環境のための奉獻文を、緊急に作る必要があります。

これからも、地球の環境問題に最優先で取り組まないまま、日曜日のミサに通いつづける者は、神を信じていないと言わざるを得ないでしょう。

本稿で私が伝えようとしたのは、以下のことです：

- ・ 物語はひとつしかありません。宇宙の物語と聖書の物語は、同じ物語の一部なのです。
- ・ 万物はすべて、同じ創造という行為から生じたものであるため、万物が万物と結びついています。
- ・ 神がもっとも望んでいるのは、私たちが、地球とそこに住む人々を尊重することです。
- ・ 信仰を持つ人々こそ、環境問題に取り組まねばなりません。
- ・ 日本史には、聖書の物語と多くの類似点が見いだせます。

参考文献

「カトリックの視点から わかりやすく説いた——万物の歴史」の参考文献目録

ルイス・フロイス神父

A History of Japan 1334 – 1615

G・B・サンソム著

Charles E. Tuttle Company, Inc.

Tokyo

1963

Sixth printing, 1987

p. 293

<http://blog.zaq.ne.jp/shibayan/article/116/>

僧になった武将

G・B・サンソム著、福井 利吉郎訳「日本文化史」p. 226

日本文化史 (1976 年) (創元選書)

Japan: A Short Cultural History

G・B・サンソム著

Charles E. Tuttle Company, Inc.

Tokyo

1931

Tenth printing, 1987

p. 273

為義

G・B・サンソム著、福井 利吉郎訳「日本文化史」p. 241

日本文化史 (1976 年) (創元選書)

1976Japan: A Short Cultural History

G・B・サンソム著

Charles E. Tuttle Company, Inc.

Tokyo

1931

Tenth printing, 1987

pp. 291-292

E.O.ウィルソン

Evening Thoughts

トマス ベリー著

メアリー・エヴリン・タッカー編

Sierra Club Books

San Francisco

2006

p. 47

Big Bang theory

The Universe Story

ブライアン・スウィム／トーマス・ベリー著

HarperCollins

San Francisco

1994

p. 7, p. 17

宇宙はグリーン・ドラゴン—ビッグバンは地球に何をたくしたか

ブライアン・スウィム著

ティビーエス・ブリタニカ

1988

アースダンス

エリサベツ・サトウリス著

バベルプレス

東京

2007

命の誕生

Perspectives on Environmental Change: A Basis for Action

マイケル B. マッケロイ著

In Daedalus (Journal of the American Academy of Arts and Sciences)

Fall 2001: Religion and Ecology: Can the Climate Change?

pp. 35-36

<http://www.theage.com.au/technology/sci-tech/melbourne-researchers-rewrite-big-bang-theory-20120821-24j5z.html>

星の原子

デントン・イーベル interviewed on

The Science Show on Radio National (Australia)

14 August 2010

<http://www.abc.net.au/rn/scienceshow/stories/2010/2982346.htm>

ゼベルカ神父

<http://www.abc.net.au/rn/encounter/stories/2011/3145229.htm> - transcript

十字軍

http://en.wikipedia.org/wiki/Pope_Urban_II (accessed 29 August, 2012)

http://en.wikipedia.org/wiki/Adhemar_of_Le_Puy (accessed 29 August, 2012)

<http://copticliterature.wordpress.com/2012/08/18/the-intellectual-malaise-of-bishop-jacques-de-vitry-and-his-failure-to-understand-that-the-copts-were-not-monophysites-but-miaphysites/>

(accessed 29 August, 2012)

聖書の編纂

The Tribes of Yahweh: A Sociology of the Religion of Liberated Israel, 1250–1050 B.C.E.

ノーマン・K.ゴットヴァルト著

Orbis Books

Maryknoll, New York 10545

1979

The Literature and Canon of the New Testament

J.N.サンダース著

pp. 676–682 in Peake's Commentary on the Bible [Paperback]

Black, M. (editor), Rowley, H.H. (editor)

Routledge

London

2001

日本の神々

日本の神々と仏

岩井宏實(監修)

青春出版社

東京

2002

ヘブライ人

The Way to Peace

L.ジョン・トペル著

Orbis

New York

1979

35%の年利

Japan: A Short Cultural History

G・B・サンソム著

Charles E. Tuttle Company, Inc.

Tokyo

1931

Tenth printing, 1987

p. 175

佐藤 信淵

佐藤信淵家學全集 復刻

佐藤 信淵, 滝本 誠一著

岩波書店

1992

The Meiji Restoration

Beasley, W.著
Stanford University Press
1991

テルザの村

Ancient Israel: Its Life and Institutions
ロラン・ド・ヴォー／ジョン・マックヒュー著
Wm. B. Eerdmans Publishing Co.
1997

ソロモン

The Way to Peace
L.ジョン・トペル著
Orbis
New York
1979

当時のパレスチナの政治情勢

キリスト教以前のイエス
アルバート・ノーラン著
新世社
名古屋
1994

Who Is Jesus?
ジョン・ドミニク・クロッサン著
HarperPaperbacks
New York
1996

Jesus' Plan For A New World
リチャード・ロー／ジョン・ブックサ・フィースタ著
St. Anthony Messenger Press
Cincinnati
1996

福音書の政治的背景
バシル・ムーア著
University of South Australia
Adelaide
1983

Jesus
ジェームズ・P.マッキ著

SCM Press Ltd
London, 1979

徳川幕府の役人

Modern Japan: A Historical Survey
ミキソ・ハネ著
Westview Press
Boulder
1992
p. 34

キリスト論

The Christology of the New Testament
オスカー・クルマン著
シャーリー・ガスリー・チャールズ・ホール訳
The Westminster Press
Revised edition
1959
Philadelphia

大規模な改宗

Doors To The Sacred
ジョセフ・マートス著
Triumph Books
Liguori, Missouri
1991
pp. 151-152, 225

黒死病(ペスト)

Ethics and Ecology
(A paper delivered to the Harvard Seminar on Environmental Values, Harvard University, April 9, 1996)
トマス ベリー著
<http://www.ecoethics.net/ops/eth&ecol.htm>

科学

Life Before Death
ブレンダン・ラヴェット著
Claretian Publications
Quezon City
1986

On Earth As In Heaven
ブレンダン・ラヴェット著

Claretian Publications
Quezon City
1988

A Dragon Not For The Killing
ブレンダン・ラヴェット著
Claretian Publications
Quezon City
1998

The Copernicans and the Churches
ロバート・S.ウエストマン著
in God and Nature: Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science
デーヴィド・C.リンドバーク／ロナルド・L.ナンバース編
University of California Press
Berkeley・Los Angeles・London
1986

Galileo and the Church
ウィリアム・R.シエイ著
in God and Nature: Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science
デーヴィド・C.リンドバーク／ロナルド・L.ナンバース編
University of California Press
Berkeley・Los Angeles・London
1986

The Historical Roots of Our Ecological Crisis
リン・ホワイト著
Science (journal)
Volume 155, Number 3767, March, 1967
pp. 1203-1207

巨大企業

Evening Thoughts
トマス・ベリー著
メアリー・エヴリン・タッカー編
Sierra Club Books
San Francisco
2006

フリーマン・ダイソン

Befriending the Earth
トマス・ベリー／トマス・クラーク著
Twenty-Third Publications

Mystic, Connecticut
1991
p. 24

「私たちは覚醒した宇宙である。」

Life Before Death
ブレンダン・ラヴェット著
Claretian Publications
Quezon City
1986
p. 84

世界の正義
一九七一年シノドス文書
中央出版社
東京
1974
p. 7

ヴァティカンの太陽電池パネル

http://www.appropedia.org/Vatican_Solar_Array

簡素な生活

リチャード・ロー著
Daily Meditation: How is simplicity both relevant and reverent?
April 30, 2010

働くことについて

ヨハネ・パウロⅡ
「創造主である神とともに生きる平和、創造されたすべてのものとともに生きる平和」
1990年「世界平和の日」教皇メッセージ
<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/doc/peace/90peace.htm>